

蘇芳集



瑞雲 高橋 さえ子

人日 青山 丈

泉石のひかりを返す初氷

踏ん張つて赤兎の泣くよ初電車

天心に耀歌の山や初日の出

人日の預金を少し下ろしけり

瑞雲の光とどむる氷かな

七草の老人らしくしてをりぬ

譜本手に半纏木の冬木かな

富士山よりもずっと近くや初筑波山

淑氣満つ琴柱一本づつ立てて

仕方なく自分で唄ふ手鞠唄

「道灌」の一曲をもて琴始(宮城道雄作曲)

大寒の護符頂いて帰りけり

冬寒し稲荷の宮の「ごんぎつね」(新美南吉)

達磨より日の当りたる達磨売り

真鶴

吉田幸敏

遠火事

金田きみ子

冬日向先師の句碑を蔵したる
先生の句碑を拭へば冬ぬくし
真鶴に集りをるは冬鷗
師を恋へば岬に揺るる野水仙
師なき身の鳩のごときに潜きたし
黙禱の臉開くる納め句座
師の御宿「原忠」に年惜しみけり

鳥に翼

小川美知子

師の星

上林孝子

単純な鳥の軀よ冬に入る
鳥に翼人に手と足十二月
寒き手ともう片方の寒き手と
必死と書きさうでもない消して冬
百円の聖樹に付属品の星
短日の街角は人待つところ
霜の夜の身をあをあをと眠りけり

瞬くは師の星ならむ冬銀河
師の星か夫の星かと冬夜空
傍目には気楽にみゆる寡婦の冬
冬ぬくし十七音のひとり言
白き船白き水脈ひき冬港
小六月人に訪はれず訪ひもせず
旧友のその後は知らず椿の実

くれなるに

木内憲子

不老門

清水裕子

書き出しの一字一画冬立てり
水の上に朝立つ冬のはじめかな
さつぱりと日向を置きぬ冬の波止
冬海は遠くがよろし日が平ら
冬帝の来てをる池の真中かな
身ほとりのいよいよ忙し三の酉
山茶花はただくれなるに散つてをり

空 想

小島みつ如

川の光

真保喜代子

茶の花やまた空想の京の旅
ふはふはと萩の落葉の猫襦
冬の蘭予定ある日の目覚めよし
さくら葉をめざす凧ことのほか
風雨すぎ陽にいささ伸び冬木の芽
塵の中より凍揚羽救ひけり
旨寝して一日おくれの袖湯かな

ごつごつと幹の歳月枯桜
一斉に走る落葉に愁ひなし
大櫓枯るる風格ありにけり
時どきは家内歩き賀状書く
初春の川の光も 県境
呆気なく過去になりたる三ヶ日
松過ぎの常の日差しの屋根瓦